

「笹川杯作文コンクール 2010 日本招聘」 訪日感想文



財団法人日本科学協会

教育・研究図書有効活用プロジェクト

目 次

中国青年報社總編集室 主任、訪日团团長 馬年華	2
人民中国雜誌社副社長、訪日团副团长 王漢平	4
上海社科院文学所 副研究員 陳占彪	5
信陽師範学院 外国語学院英語学部 4 年 李師荀	6
中国人民大学經濟学院經濟学部 1 年 羅樹郁	6
汕頭大学中文学部 4 年 賴麗思	7
北京市房山区園林綠化局果樹研究家 王喬	7
浙江大学經濟学院金融学部 2 年 王翔	8
北華大学日本語学部 4 年 藩瑩	8

知恵を使って相違を解消し、愛で未来を開く

中国青年報社総編集室 主任、訪日団団長 馬年華



旅行は毎回が全く新しい体験である。

記者は以前に二度、日本へ取材に行っているが、いくつかの地方をさらっと見ただけだった。結局、何年も過ぎて記憶は歳月により薄まり、心に残っている多くが暖かみと感動で、都市に対しての具体的な印象はいくばくも残っていなかった。

「笹川杯作文コンクール－感知日本－」受賞者が訪日する機会を借り、7名の一等賞受賞者に随行して再び日本を訪ねることができた。短い一週間の間に、私たちは東京、沖縄、大阪、京都、奈良の地を踏んだ。日本科学協会の綿密な手配、入念な接待、思いやりのあるサービスのおかげで、今回の訪日は心身を喜ばせ、視界を広げるものにできた。また、ショッピング欲を満たすこともでき、大きい収穫があったと言える。

* 知らないこと自体は、悪いことではない

日本に着いて二日目、私たちは日本財団の本部で笹川陽平会長と会見した。

会長のお話は単刀直入だった。いわく、「笹川杯作文コンクール－感知日本－」はうまくいっている、応募者が年々増えるのは喜ばしいことだと。

地図上では中国と日本は隣人であるが、日本人は中国をよく知らず、中国人は日本をもっと知らない…両国に政治上で問題が現れることは、双方にとってよいことではないと語られた。

訪日団のメンバーは大多数が青年学生だった。笹川会長は一同に「皆さんが日本を訪れ、日本語を学ぶことは、日中間の交流を促進するためとても役立つことです。私は皆さんが「親日派」になることは望みませんが、もっと日本を見て、もっと日本を知って欲しいと望んでいます」と話された。会長は心を込めて青年学生に語られた。若い人があまりものを知らないことは致し方ない。一時的に知らないこと、理解していないこと自体は悪いことではない。知らないことは質問できる。このとき会長は不恥下問（教えを請うのを恥としない）という中国の成語を引用された。

確かに、日本へ行く前に同僚から聞いていたとおり、会長は慈悲深くて優しく、英知に富んでいて付き合いやすい年輩の方だった。その後の時間、会長は中国の学生からの色々な問題に根気よく回答され、場の雰囲気は気楽で活発なものとなった。

* 日本の大学生が最も気にするのは就職問題

日本の大学生との交流が、今回の訪日の重点の一つである。笹川陽平会長との会見後、私たちはグループに別れて8名の日本の大学生および2名の中国人留学生と交流活動を行った。

同じグループになった4名の日本の学生は男女二名ずつだった。男子は加藤拓馬さんと仙波徹郎さん、女子は新井さんと豊田さん。若者達は初対面で意気投合し、旧知のように話を弾ませた。二人の中国人留学生、王芳さんと范鷗さんが加わり、双方の交流はとても順調になった。国会議事堂から浅草寺まで、秋葉原から東京タワーまで道中では、中日両国からの若者が二三人ずつ固まって、時々英語で話しかけたり、日本語で交流したりしていた。間には何語か中国語も聞こえた。

雑談の中で、女子学生の新井さんが質問してきた。「私たち日本の大学生が考えていることをご存じですか?」「もちろん知りたいです。特に知りたいのは、最大のプレッシャーに感じることは何ですか?」と私が言うと、仙波さんが割り込んできて「就職!今は不景気で仕事が見つけにくいのです。理想的な仕事を見つけようと思ったらもっと大変です。」と答えた。他の日本の学生も彼の話に同意していた。

彼らの主な関心事は給与ではないのだ—留学生の范鷗さんが補足してくれた。収入は就業年数と連動しているので、長く勤めれば収入も自ずと増えるからだという。後から更に知ったことだが、日本人は40歳から50歳の間で収入が最も高くなるのだそうだ。それを聞いて、私は思わず合理性を褒め

たくなった。給与設計がとてもヒューマナイズされている。この年代の人は一般に、年寄りから子供までの家族を養う責任があり、何かとお金がかかるからだ。

食事中、ちょっとしたことに気がついた。日本の学生はものをきれいに食べ、一粒のお米も食べ残さないのだ。訪問団のある女の子は、半分しか食べないうちに、もう食べきれないと言って箸を置いてしまった。とても痩せていて小柄な日本の女の子である豊田さんは、どうしてご飯をきれいに食べ切れたのだろうか？ご飯は食べきれ、と日本の学生がいきいきと儉約の授業をしてくれたのである。見たところ、家庭と学校の教育、そして小さい頃から養われた習慣がとても重要なようだ。これは、私達の熟考に値する。

夜に日本の学生と夕食を共にした。みんなの話がとても面白く、酒がすすみ談笑した。食後はプレゼントを贈りあって、名残惜しく別れを惜しんだ。私たちの車が遠くなっても、日本の学生達は夜間の中で手を振ってしてくれた。

* 沖縄における中国の痕跡

沖縄で、私達は予想外に尋常ではない歓迎ともてなしを受けた一亜熱帯に位置する豊見城市で、人工雪を降らせ、私たち中国からの客人を出迎えてくれたのだ。

豊見城市の宜保晴毅市長はとても若く、まだ43歳であった。気迫のある人だということが見て取れた。彼が当選できたのは、市民が彼のこの気迫と向こう意気を重視したからかもしれない。彼は、豊見城市の都市発展力を日本一にしたいと語っていた。

訪日団の団長として、私は次の答辞を述べた。「この地に着いてすぐ、一枚の横断幕が目に入りました。『朋あり遠方より来たるまた楽しからずや』という孔子の言葉が書かれており、とても親しみを感しました。市長のお名前を見て、その近似音から中国の別の言葉を思い出しました。『情義無価』（情義に値は付けられない）というものです。今回の訪問を通じて日本に対する理解を増し、日本の人々との感情と友情が増進できることを望んでおります。きっと、双方が誠意を持って向き合い、真心でつきあえば、親友になれると信じております。もしいつか宜保市長が中国を訪問されることがあったら、そのとききっと、中国で貴重な友情を得られるようにいたします。」

その夜は全日空ラグナガーデンホテルに泊まった。静かに波の音を聞き、打ち寄せる波を見てみると、どうも満足できないものがあつた。私たちの一行は夜にも関わらず靴を脱ぎ、沖縄の海水と砂浜に初めての「肌でのふれあい」をした。

二日目、私たちは旧琉球国の都、首里城を見学した。第二次世界大戦の末期、米軍は200機近い飛行機を出動させてここに狂気じみた無差別爆撃を行った。首里城はほとんど廃墟になったが、のちに元の様子をまねて再建された。首里城にはいとすぐ額が目に入り、守礼之邦という4つの漢字が目を引きつけた。聞くとところによると、この額はとても由来があるのだそうだ。

琉球国は1372年に明朝への朝貢を始めた。そのため、中国の冊封史が定期的にこの地へ冊封と巡視に訪れていた。1579年、中国の冊封史が招きに応じて首礼城の城門に額名を書くことになり、少し思索して、「守礼之邦」と書いた。「守礼之邦」という名誉も今なおこの額と共に称えられている。

王宮内に見られた中国の痕跡にはまだたくさんある。清朝の康熙大帝、雍正帝、乾隆帝、嘉慶帝が、みな琉球国王に対して御筆を賜っていることは、琉球国が中国とずっと密接な往来を保っていたことを示しており、また双方の友好的付き合いの証拠でもある。現在に至るまで、この地の人々の多くの風俗文化や生活習俗に、まだうっすらと中国文化の影が残っている。私たちのような中国の観光客に親しみと温情を感じさせてくれるのだ。

* 唐招提寺の傍聴者

奈良は今回の訪日で最後に訪れた場所である。2月21日、私たちは先に東大寺と奈良公園を見学して、午後に唐招提寺へ行った。

唐招提寺は鑑真大師が自ら設計し建造を仕切ったところで、ここもその修行と布教の場だった。大師は6回日本へ渡って、5回失敗し、生命の危険を冒して、苦勞をなめ尽くし、遂に日本へ到着した。彼は驚異的な気力と崇高な精神で中日友好交流の航路を切り開いたのだ。鑑真が亡くなると、日本人

は様々な形で鑑真の輝かしい一生を称賛した。官僚、僧侶や文人墨客は大量の詩文を記し、鑑真の不朽の業績を謳歌した。このうち、藤原刷雄という朝臣が『五言 大和上を傷む』の中で、「萬里ニ燈ヲ傳ヘテ照ス。風雲遠國ニ香シ。禅光百億ニ耀ク。戒月千郷ニ皎カナリ。哀シキ哉浄土ニ帰ル。悲シキ哉、泉場ニ赴クコト。語ヲ騰蘭ノ跡ニ寄セテ、慈万代光ニ洪セリ。」と記している。

唐招提寺に身を置くと、心の中は景慕の思いに満ち、ただ鑑真大師の像に拝謁することに縁がなかった。ガイドに従って寺の中を観覧していると、気づかないうちに見知らぬ顔が一つ増えていた。理解して知ったのだが、この六十歳近い日本人はずっと私たちについて歩いていた。純粹に中国語を学ぶためだという。この学習への情熱には感動した。私はボランティア経験のある大学生を呼び、彼女にこのお年寄りの中国語学習を少し手伝わせることにした。

東京でも、沖縄でも、中国文化を好むという人数人に出会った。彼らから時々出てくる中国語が意外な喜びとなり、一種の親しみを感じさせられた。二千年あまりの中日交流史上、両国民は文化の上で交流し溶け合って、相手の中に自分が見えるという構造を形成したのか?! どのようなときであれ、この種の文化的交流はその歩みを止めない。

* 民間交流の新たな力

「笹川杯作文コンクール―感知日本―」は2008年から3回開催され、成功を収めてきた。今や、このイベントはすでに中日の民間友好交流の新しい力となっている。中日の青年と学生の間には、理解を促進し友情を増進する橋を架けているのだ。そのブランド効果はすでに形成されており、影響力もカバー範囲も日増しに広がってきている。

2月16日、笹川陽平会長が訪日団との会見時、「笹川杯作文コンクール―感知日本―」はうまく行っている、中国青年報社はこのために多くの仕事をしてくれていると述べられた。実際、このイベントの成功は、日本科学協会と日本財団による協力と支持のおかげでもある。中国青年報社の責任者は、喜んで日本科学協会および日本財団と手を携えて努力すると何度も表明してきた。両国青年と学生の友好交流と相互理解を促進するために、両国民の友好的な感情を増進するために、力を尽くす。この行いはのちのちまで効果が及ぶ善行なのだ。

2008年の中日青年友好交流年開幕式で、中国の胡錦濤国家主席が、両国民の代々の友好は、結局のところ両国の青少年から始めるものだと指摘している。彼はまた喜んで記念の言葉を「青春の力を挙げて、代々の友好を図る」と書き記した。青年は国の希望、民族の未来と見られている。中日友好事業の発展において、青年も当然、重任を担うべきなのだ。

歴史は動かぬ山であり、てこでも動かすことはできない。迂回することもできず、勇敢に向き合うしかないのだ。結局のところ、越えられない山はない。冬は寒くとも、しまいには過ぎ去る。氷山がまた大きくなっても、溶けることはある。中日両国の間には不愉快な過去があった。現在でもいくつか問題はあつたものの、両国民が誠意を持って向き合い、真心でつきあえば、知恵を使って相違を解消し愛で未来を開くことができ、中日関係もきっと暖かさを取り戻すだろう。

中国青年の「感知日本」の旅に随行して

人民中国雑誌社副社長、訪日団副団長 王漢平



「笹川杯作文コンクール2010―感知日本」の優勝受賞者が2月15日から22日まで日本財団の特別協賛により日本を訪れ、日本の大学生と交流を深めるなど8日間の訪日と視察を行った。

3年目となる今回の「作文コンクール」には、一万を超す応募があつたが、応募した若者の多くは日本を訪れたことがないにもかかわらず、心の中の日本を情熱的に綴り、中国と日本の文化の違いと共通点を冷静に見つめるなど、力作ぞろいだった。優勝受賞者は7名で、大部分は大学生で、日本語による作文コンクールの2名の優勝者の一人、潘瑩さんは吉林省吉林市にある北華大学の学生である。

東京に着いた訪日団一行は、まず、笹川陽平日本財団会長と大島美恵子日本科学協会会長を表敬訪問した。今回の訪日日程には両国青年の“合同活動”が組み込まれており、優勝受賞者の7名は早稲田大学等の8名の学生と合流し、それぞれ4名ずつ一組8名の2グループに分かれて、浅草、秋葉原、東京タワーなどを巡った。初対面にもかかわらず、若者同士の話題は尽きず、忘れ難い交流の半日があったという間に過ぎてしまった。東京では、国会議事堂、有明清掃工場、パナソニックセンターなども見学し、ホテルオークラでは茶室「聴松庵」で日本の茶道を実際に体験することができた。

* 理解と交流の重要性を認識

東京の次に訪れた沖縄では、豊見城市の宜保晴毅市長らが『論語』にある孔子の有名な言葉「有朋自遠方來、不亦樂乎」（朋あり遠方より來る、また樂しからずや）の横断幕を掲げて熱烈歓迎してくれた。交流会場では訪日団を人工雪が迎えてくれるなど、心のこもった演出に皆、驚きと感動を隠せなかった。

旅の最後は関西である。京都では金閣寺、清水寺を、奈良では東大寺、唐招提寺を訪れ、日本の伝統文化と中日の長い交流史をさらに深く学ぶことになった。

訪日前の7名の若者たちの日本イメージは、多くがメディアから得たものであったが、今回、実際に日本を訪れ、自らの目で見、自らの耳で聞き、つぶさに日本を観察したことにより、全く新しい沢山の体験をすることになった。潘瑩さんは「日本の至るところに見られる生き生きと生長する様々な樹木が強く印象に残った。」と語り、細かなところに日本の美しさを発見したようだった。浙江大学の王翔さんは、最近、中国で非常に流行している“萌”文化が、実は日本の“動漫”（漫画・アニメ）から入ったものであることを発見し、中日両国が様々な分野で、複雑ながらも不可分の関係にあることを身をもって体験した。中国人民大学の羅樹郁さんは、自分の日本理解があまりにも表面的であったことを知り、「もっと勉強しなければいけませんね」とため息まじりに語った。

7名の青年たちに共通の感覚は、日本に対する親近感が深まったということ。訪日を通じて、彼らは理解と交流の重要性をさらに深く認識することになった。

* 交流の素晴らしいチャネル

日本科学協会のきめ細かい配慮のおかげで、わずか8日間というスケジュールながらも、7名の中国の若者たちは、日本の政治、経済、文化、社会生活など多方面での見聞を大いに広め、日本の青年に対する理解と友情を深め、さらには相手の国にどう向き合えばよいのかということを知った。それは、訪日団の表敬訪問を迎えた時に笹川陽平会長が語ったように、（中日）両国は隣国同士ではあっても、まだ相互理解は不十分であり、絶えず交流を深めていかなければならない、ということだ。「笹川杯作文コンクール—感知日本」は、まさに両国青年の交流を深めるための素晴らしいチャネルだとも言えよう。

「笹川杯作文コンクール—感知日本」は人民中国雑誌社、日本科学協会、中国青年報社が共催し、日本財団が特別協賛するもので、これまでに三回のコンクールが行われてきた。この事業は中華全国青年連合会から「中日青少年友好交流活動」に認定されており、中国全土に大きな影響を及ぼすまでになっている。

日本ではお金持ちが羨まれない

上海社科院文学所 副研究員 陳占彪



訪日の期間中、日本財団の宮崎正さんに、今回の訪日で日本と日本人に対する印象が「刷新」されたとお話した。

2008年の夏休みに日本を旅行したことがある。旅行だったため、その時は直接日本人と対面することも少なく、まして交流と言えるものはなかった。しかし、今回は、笹川陽平会長、青年学生、大学教授、ごみ処理場のスタッフなどを含め、直接たくさん日本人と対面して接触し、直接交流した。これは以前の旅行では実現が難しかったことだ。以前は日本と日本人に対する

印象の大部分がネット、新聞、書籍から来ていた。直接の接触と交流に比べ、異なる認知の仕方を感じる印象は往々にして異なるものだ。

私は日本財団の笹川陽平会長に二つの質問をした。中国の GDP が日本を抜いて世界第二位になったことについて、いかがお考えですか？会長のお答えは、中国の経済発展が現在の水準に達したことは賞賛に値するというものだった。彼からすると、日本の GDP 順位が世界で第二位だろうと第五位だろうと重要なことではないのだ。重要なのは、お金を社会福祉に用いて、人々の生活に幸福が得られることなのである。「幸運なのは、日本は世界でも貧富の差がもっとも小さい国の一つであることです。しかし、中国では貧富の差が大き過ぎます。早く訂正すべきです。日本では大金持ちの存在が許されていません。例えば、どれだけ財産があっても、相続税の徴収により、三世代まで豊かではられません。しかも、日本では、人々がお金持ちを羨まないのです。」

後日、新聞で、「1955年から1975年までの20年間に、日本人の“中流意識”が42.5%から77%まで上昇し、自分が“下層社会”にいると思うという人は、57%から21.8%にまで低下した」という記事を見た。これは会長のお答えの注釈の一つかもしれない。

金閣寺で日本人の穏やかさを経験

信陽師範学院 外国語学院英語学部 4年 李師荀



2月20日、私たちは京都へ行き、有名な金閣寺を見学し、意外にも文化の洗礼を受けた。金閣寺の境内で5分ほど歩くと、鏡のような池に浮かんでいる舍利殿が目に入る。舍利殿は金箔の装飾のもと、いくぶんの尊さと内向性を見せており、少々質素さが加わって、派手さと覇気は僅かばかりも見られなかった。この眺めに、私は思わず日本人の穏やかな性格を連想した。

実を言うと、日本に来る前には、確かに日本に対して少しばかりの偏見があった。しかし、本当に日本人と接触し友達になってみると、この民族独特の穏和さに気づいたのである。ふだん顔を合わせるとお辞儀をするのは単なる礼儀だけでなく、心からの尊重と感謝も込められているのである。彼らは水のように、静かに平和に他人の傍を流れていく。相手に面倒をかけることを恐れているのだ。日本人の心の琴線を弾けるのは、疾風と暴雨ぐらいではないかと思う。

人の流れに従って寺院の奥まで入ると、書院の側面にある小さな山に目が引かれた。そこを遠く眺めると夕佳亭の一角が見える。何本かの松の老木が力強く伸びており、地上の苔は緑色から次第に柔らかな黄色へと変わり、ふんわりと山の斜面全体を覆っていた。つぼみをつけた一本の桜の木がその中に彩りを添えており、まるで和服を着た少女のように、荘重で優雅だった。中国建築の風格と異なり、曲がりくねった廊下は見られず、四隅がせり上がった屋根も見られなかった。舍利殿のほか、寺院内の他の建物もほぼ全て原木そのままの色か茶褐色で、素朴さが多彩な植栽と調和していた。一種独特な文化の格調と品位の現れである。こうした完璧な配置は、精神修養によく、同様に日本人の穏やかさをも具現している。

この美しい禅寺の中には、当然、仏法の荘厳さもあったが、より多かったのは、心を晴々とさせる調和のとれた雰囲気であった。そこから日本人の美への追究、日本人の心の中のシルエットを見いだすことは難しくない。

浅すぎた以前の理解

中国人民大学经济学院経済学部 1年 羅樹郁



日本へ行く前に、日本に関する書籍を何冊か読んでいたし、常に日本関連のニュースには注目していたため、日本についてはよく分かっているつもりだった。しかし日本へ行ってみると、それまでの日本に対する私の“理解”はあまりに浅く、表面的で、教条主義的過ぎたものであることに気づいた。

現在は、中国にいても、日本にいても、多くの人がこうなのだろうと思う。私たちは、自分の視点

で相手を見たり、相手を責めたりさえする。十分に認識し、了解している前提において、平和と理解の心で矛盾を薄め、問題を解決するというのではないのだ。今回の短い訪日交流により、それまでの日本に対する認識はかなり修正された。

東京で笹川陽平会長と会見した時の彼のお話を、私は今も覚えている。「中日両国にはそれぞれ鮮明な長所があります。しかし、現実には、多くの人が真に相手を理解してはいないため、誤解が生じています。作文コンクールのような事業や中国の青年に日本を訪問してもらおうといった事業は、実行することにより、皆さんに自分の視点でもっと日本を理解してもらい、そこから両国青年の交流と理解を増進するという趣旨なのです。」

確かに、私個人の感覚からすると、中日両国はよく「一衣帯水の隣国」と言われながら、中日両国民の相互理解はあまりに限定的なのである。

日本に立って中国を顧みる

汕頭大学中文学部 4年 頼麗思



私は、元々、機会があれば、日本を旅してみたいと思っていた。それは、見聞きすることで、それまでに書籍、メディアや他のルートで得ていたこの国に対する様々な印象を検証できることを意味する。そして、米国に留学中の友人が、意味深長な言葉を語っていた。「もしかしたら、君も新しい角度から中国を感じ取れるかもね。」

今回の訪日では、買い物をしながら日本の商業の繁栄を体験する機会が何度かあった。東京の秋葉原の商店街でも、沖縄の豊見城市のショッピングセンターでも、大阪の道頓堀界隈でも、“中国製”はどこにでもあった。私にとって、そのタグは目新しいものではなかったが、この上なく目障りだった。「中国人が外国で“中国製”商品を買って帰る」という風刺的なジョークがずっと頭の中をめぐっていた。

日本科学協会の伊藤隆さんと長話をした時、「至る所にある“中国製”に、全身が苦しくなります」と言うと、伊藤さんは、40年前、彼の青年時代には、日本の旅行客が海外で“日本製”を買った時にばつの悪い思いをするということもあったということ話をしてくれた。40年後の今、中国が当時の日本と似通った歴史風景を演じており、当時の日本が直面していた類似の問題にも直面しているのだと思う。当時の伊藤さんにとっても、今の私にとっても、時間を遡って過去に戻るなどという過分の望みは叶えられず、前倒して未来で生活することなども期待できない。現実と向き合い、未来に向かうしかないのだ。こうした微妙なことに敏感に気づくことができるのは確かに尊いが、自分の国が発展の只中であって、意に添わないことも存在することを、如何にして心穏やかに評価するかが重要であり、また、現状を変えるために奮い立つことこそ正しい道であり、その努力がより重要なのである。

道中の恍惚-古代中国に戻ったような感覚-

北京市房山区園林緑化局果樹研究家 王喬



訪日4日目、私たち一行は名高い「琉球の古国」、沖縄に行った。海岸に近づくと、バスは中国の海南省三亚のような街の中を走り、とても懐かしいような感情が自然に生まれてきた。とても懐かしいような感じと親近感は、沖縄にいと間ずっと感じる事ができた。

沖縄に着いてすぐ、白地に黒い文字が書かれた巨大な横断幕が目飛び込んだ。そこには中国古代の文人、孔子の『朋あり遠方より来たる また楽しからずや』が書かれていた。親切で心のこもった歓迎の挨拶に、旅の疲れがすっかり癒された。

小雨の中で琉球村を散策していた時、中国の福建省沿海部の多くの特徴を備えた木造家屋の前で足が止まり、そこから立ち去ることができなくなった。家の中から行きつ戻りつする三線の音が、かすかな雨音を伴って、人々を陶醉させた。随行した馬団長が「この琴の音は、まるで聞き覚えがある音のようだ」と言った。私も同感だった。どんな音楽かは口に出せなかったが、ただ非常によく知っているとは感じたのだ。近くまで歩いていくと、その“三線”にも見覚えがあることに気付いた。後で

分かったのだが、“三線”も中国から伝わったもので、中国では三弦琴と呼ばれている。

広々とした首里城では、姿が中国の古代宮殿と似ている首里殿、「守礼之邦」と書かれた門上のアーチ、或いは城内の随所で見られる「中国の要素」が、全て琉球の古国と中国の歴史との源を示していた。

恍惚として古代中国に戻ったような感覚は、那覇の街頭で本物の豚の頭が視線に入るまで続いた。あるホテルの入口に缶のようなものが置いてあり、その上に大きなピンク色の豚の頭が乗せられていた。その豚の頭は見た感じかなり怖い、目を引きつける効果はあった。ガイドの説明によると、日本本土の人とは違い、沖縄の人は中国人と同様に豚肉を食べるのが好きなのだという。古代中国の飲食文化が沖縄に対して知らぬ間に与えた影響は、今に至ってもこれほど深いのだ。どうりで、ホテルの入口に公然と豚の頭が置いてある訳だ。

溶け合う日本語と漢字

浙江大学经济学院金融学部 2 年 王翔



争いを好みながら温和で善良、武を尊びながら美を愛し、横暴でありながら礼節があり、頑固ながら適応することができ、従順にまた怒りながら譲り合い、忠誠を尽くしながら裏切りもし、勇敢ながら臆病で、保守的ながら新しさを好む。これはルース・ベネディクトによる日本文化の紹介である。「菊と刀」の対立と統一は、日本民族の特質を構成している。疑いと好奇の心で、私は訪日団のメンバーと共に日本の旅を始めた。

早稲田大学の学生との交流では、日中英の三言語を併用していたが、その時、日本語と中国語には沢山の類似点があることに気づいた。漢字が中国から伝わって、日本の文字を構成する重要な部分となったのだから、それも無理はない。文字において、中国語と日本語は同根同源だと言える。文字の一致性は、中日両国民が互いに意思疎通し、理解するためには、とても重要な絆となる。

例えば、地下鉄の切符に「一日乗車券」とあるが、中国語での意味と完全に同じで、繁体字か簡体字かの違いしかない。これに似た例は枚挙にいとまがない。しかし、例外もある。日本語で言う“手紙”は中国語でいう“信”であり、字面だけを見て“手紙”を“トイレトペーパー”と憶測解釈しては、笑い話になってしまう。

近年来、中国語も日本語からいくつかの文化的な要素を吸収して豊かになってきた。中国語にモダンさやおしゃれさが加わって、多くのネット流行語になっている。例えば、近頃、中国国内で流行っている“萌”は、清純で可愛いという意味だ。日本のメイドショップで、明るく着飾った日本の女の子がキャンディにカタカナで“萌”と書いているのを見て初めて、この文字がそもそも日本語に由来するものであったことを知った。ネット語には日本語に由来する要素がまだ沢山ある。例えば、“御姐”は成熟した強い女性を指し、“宅男”はいつも部屋に引きこもり、毎日ゲームやBBSばかりしている男性を指す。“蘿莉”は可愛くて小さな女の子を指し、“正太”は可愛くて小さな男の子を指す、等々。これらは日本アニメに由来する言葉で、中国文化に一抹の生き生きとした色彩を注ぎ込んでいる。

中日両国の間には複雑で入り組んでいて不可分のつながりがあるということが、日本への旅で深く体得できた。

細部から日本を見る

北華大学日本語学部 4 年 蔭瑩



「日本は表面的に見れば中国に似ているが、実はとても異なる国」これが今度の日本の旅で、私に残った最も鮮明な印象である。歴史問題や国境問題には触れず、日本に行ったことがある人たち全てに深い印象を残す人間味あふれるもてなし、そして、日本人の日常生活と密接に関連している環境保護問題はさておき、ただ私が経験した、普通の日常生活の細部から見た日本をお話したいと思う。

「日本は細部で勝つ国です」。訪問する前に、このような日本への評価を聞いたことがある。今度の

日本訪問の後、私はこの観点に対して深く同意する。全ての都市のマンホールの図案がそれぞれ異なり、一つ一つの広場に仕込まれてある装飾が時計に至るまで、大部分の店の入り口のイラスト装飾の看板、有名な観光地のマスコットまでそれぞれ異なっている。土地の実情にあう精緻な高い建物から、鐘楼と間違えるほどデザイン感がある煙突のついたゴミ清掃工場までである。この国は、いつもその細部で「生活の中に美が足りないのではなく、美を発見する目が足りないのだ」という言葉を証明している。

日本は独特の文化理念を持っている。日本人の心の中に共通にある“日本のエレメント”で、彼らはいつもその“日本のエレメント”を強調している。和服は日本の“国服”であるが、全てのホテルで部屋に用意されていたのは、普通のパジャマではなく、日本の和服を改良した軽便な浴衣であった。歌舞伎は日本の“国劇”で、豪華な服飾、多彩な化粧、苦心を凝らしてデザインした装身(装飾)具、そして、心をこめて装う歌舞伎役者も“日本のエレメント”の代表である。彼らを自分自身の目で見ただけではないが、その姿はどこにでも見られる。例えば、ティッシュペーパーのパッケージや精巧な扇の上に描かれているのは、いつも彼らの姿である。桜は日本の“国花”として当然“日本のエレメント”の不可欠な構成部分であり、街角に貼られた桜のポスターや、桜の開花に常に関心を払うニュースにも、日本人の桜に対する心からの愛が具現化されている。このように強調された様々な“日本のエレメント”は、日本とこの国の特色をさらに鮮明なものにする。

私が日本でたくさん目にしたのは細やかなところであり、私を感動させたのもこうした細やかなところである。細やかなところの背後には距離が隠れていると、私は思っている。もし、私達が全てのことをきちんと細やかに行うなら、どんな事でも実現できないことはないだろう。